Ｈ６年 1994年 46才　　大琳刻

１９９４年教職への道

ほめること、しかること

文学部　国文学科助教授　荒　金　信　治

この褒める事と叱る事は人間が社会を形成する以前から今日に至るまで、人間教育の重要な課題である。

動物の世界においても親が子供を叱り付けたり、子供を優しく褒めてやる事は日常茶飯事の事で、決して人間社会だけの事ではない。

近頃、教育論議の中で「叱る事」が悪いかのように「子供を褒めなければならない」と、よく耳にする。何だか現在の教育において褒める事のみが先行している事に、一つの落とし穴を感じてならない。

それは、特別大事な事ではなくても社会的に目に付きやすい行動であれば、即、次から次へ全体から個へとその影響を受けかねない現代社会に繰り広げられる。褒める事と叱ることの論議の上に於いて、尚且つ教育を携わる者は「何が正しく、何が大事であるか」を、いつも問い続ける必要があるにも関わらず、単に「褒める事」のみに片寄っていることにある。

「褒める」と言う事はなんだろうか。褒めるという処置にどんな効果があるのだろうか。又、「叱る」と言う事は…。この両者について少し考えてみたい。

（褒めると言う事）

褒めると言う事は確かに大切な行為ではあるが、現状に於いて「褒める」といった行為の後の処置が一つの問題を感じている。褒めた上にいつまでも先生や親がその子に関与し、何時までも接し過ぎては、褒める事によって生じる教育効果が薄らいでしまう。褒めた後は少し間合いをとり、その対象者を一人にさせ考える時間を与えることの方が大切である。

褒められると言う事は、褒められた者が、その時点で自分を見詰めなおす一瞬であり、自信と不安の両者を一度に感じる時でもある。もし仮に、実力と自信のバランスがうまく成立すれば、独り立ちする気運が高まり、褒められた事を契機に自立へと向かう事も可能となる。しかし、実力と自信のバランスがとれず、少しの不安定さでも生じれば子供達は褒めてくれた人の元に、どうしたら良いかと尋ねにくるだろう。

例えば、親や先生でもよい「褒める」と言った行動の後は、その対象者と一旦距離を持たなければ「褒める」と言った動作自体に意味がなくなってしまう事になる。

（叱ると言う事）

叱ると言う事の内容を分解すると、その対象者を精神的に孤独にさせる事と言えよう。だから、叱った後はその子を一人にさせてはならないし、叱られた子はそこから離れてはならない。

叱った後、一層その子に近付くか、抱き締めてやらなければ、叱ると言う事自体の意味が失われてしまう。指導者にとって、叱ると言う事にはその対象者として継続して責任を取って行くと言う宣誓であり、責任をとらない指導者は指導者としての資質も問われてくる。

褒め過ぎても子供を駄目にし、叱り過ぎても駄目になる。褒めれば一人にさせる事の間をとり、叱れば抱き締めてやる。この何とも矛盾した行動は教育者が教育者として存在するための必要条件かもしれない。

「褒めて抱き締め、叱って一人にさせる」と言う逆を行えば教育上大変な事になりその対象者は、子供どころか大人であっても駄目になる。

この真偽の選択は教育上日常の事であるから怖いのである。一つの家に子供の数が少なく、学校においても生徒の数が少なくなっている現在、気が付きにくい教育的問題点の一つである。

褒める事と叱る事は確かに教育的には必要であるが、褒める事も叱る事も教師は「いのち」を張って取り組まなければならない事である。

教育の立場に立とうとしている学生諸君、世間の流れと無関係に対象者一人一人に合った「褒める事と叱る事」についての対応をじっくり考えてほしいものである。

（平成６年）